

安政の大獄で佐伯藩預かりとなった

水戸藩士 鮎沢伊太夫と佐伯藩(三)

菅野 隆 光

(会員 佐伯市中山)

一、別れを惜しむ日々

十時過ぎ、髭、月代を剃って服を改めた伊太夫を秋山床兵衛等数名が大手門を通り大日寺書院¹⁾に案内する。伊太夫の記す所によれば「大日寺は公使旅宿ノ寺也」(『再来紀行』※以下再と略記p.590)とある。藩の公式の宿所の役割を果たしていたものと思われる。

書院で寛ぐ間も

なく、殿様の使いとして長溝保太夫が
 麴^{そま}抹ながら料理を
 賜る事を告げ、その
 後も家老戸倉六郎
 兵衛、番頭間七郎衛



【大日寺書院】

門(『再来紀行』の表記による)など藩の重役が続々とお祝いに訪れた。そして警備にあたった守衛士等と八ツ半(15時)ごろから祝杯をあげたのである。その後も祝いの客はひきもきらず、落ち着く暇とてなかつたであろう。しかしその日の日記の最後には「此日心情恍惚如夢只々、恩命²⁾を感激流涕スルノミ」(再p.590)と記している。朝は牢の囚われの身、夜は書院の客人、生涯生きて出ることの出来ぬ管の牢を出て身を解き放たれた激変の一日の思いは、「心情恍惚夢の如し」の言葉に籠もっている。

翌十七日、外を散歩する。

「此寺ノ後庭頗ル廣ク、城下ハズレノ往来ヲ見渡サル³⁾。維為囚既四年、此日始テ樊獄ヲ出テ遊歩シ日月ノ光ヲ拝ス、心情云ハシ方ナシ。夫ニ付テモ故郷老双親及ヒ妻子ノ歎モ如何計ト遠察シ、窃ニ涙ニムセブ。」(再p.591) 久しく浴びることのなかった日の光を浴びながらしみじみ



【大日寺後庭】

と喜びをかみしめ、後庭を巡り、遠い故郷の両親、妻子のことを思い涙したのである。

「文武の才を兼ね、歌を能くす」とも評されている伊太夫は、「再来記行」でも折にふれ和歌を詠んでいる。最初の歌はこの日二首、此日に至り夢もやゝ覚める心地すれはという詞書に続き、

夢とのみたとる我身の事もやゝ

おもひそ覚ぬ現也とは

故郷にとしふりませるふた親を

ふたゝひ仰くことの嬉しさ

と赦免二日目の心境を詠んでいる。

前日も、「諸士ト祝杯」を酌んだ伊太夫であったが、これから出発まで祝宴が続いた。まずこの日十七日は「追々賀客来り祝盃夜二更(23時)ニ及フ」。十八日、「当直」一同祝盃ヲ酌ム夜分ニ至ル」。

十九日快晴。天氣に誘われ、この日も後庭を散歩している。夜は「晚酌及夜同前」とある。二十日、「諸子皆来訪頗ル大會杯盤狼藉及三更(1時)」と、大いに盛り上がっている様子である。

二十一日、昼は藩の重役にお礼の挨拶回りをしてい

る。その帰り五所明神に参拜。正装をした外出であったので「四年来始テ帯刀歩行、腰痛ヲ覺ユ」とある。武士が帯刀して歩き、腰痛を覚える、とはなかなか聞かぬ話である。それだけに帯刀はおろか運動もままならなかったであろう幽閉中の厳しさが窺われる一挿話である。その日の夜は「諸子追々来訪、頗ル壯會酒宴如例夜四ツ過(22時)ニ至」という様子であった。連日の酒宴で疲れたか、二十二日の記述はない。

そしていよいよ出発の前日二十三日となる。「此夕諸子別ヲ惜ミ追々過訪満坐貳十人余、杯盤狼藉歌舞恐クハ郭中ヲ驚スラン、夜四更(3時)ニシテ止(再泊也)。別れを惜しみ集まった者二十人余。酒を酌み交わしながら歌い踊って深夜まで送別の宴をくりひろげ、城下の人を驚かした。このようにして伊太夫が過ごす最後の佐伯での夜は更けていったのである。

宴に連なつて杯を交わし別れを惜しんだ人ばかりではない。多くの人がそれぞれの祝いの気持ち、惜別の思いを伊太夫に届けている。真つ先に祝いの酒一樽と鴨一頭を届けたのは当番表にも名を連ねていた儀蔵であった。儀蔵を始め祝いを受けた人々の名前を贈

られた品や内容を、伊太夫は細かに記録している。その数五十七名。品物はやはり酒肴が多いがその外に意外な品としてはジャボン（ザボン）も二名が贈っている。「大サ可驚」とある。淡窓の書、杏雨の画を贈った人もいる。手沢の硯、小刀の鐔、曲物、菓子、砂糖、鏝節、梅干などなど実に様々な品物が記録されている。自分の惜別の思いを詩歌に託し贈った人も多い。何人かの名前も記録しているが、あまりにも多かったのであろう。「其他諸子ヨリ送別ノ詩歌追々到来、一々記二不暇略ス」と記している。

出発前日、多くの贈りものを記録した最後に「小林繁之丞母ヨリ紫蘇附是ハ関守人ヲ以、内々贈ラル」と記されている。「紫蘇附」はおそらく紫蘇漬であらう。書画など多くの贈りものに比すれば実にささやかな贈りものである。繁之丞の母はどんな思いを込めて贈ったのであろうか。又伊太夫はそれをどのように受け取ったのであろうか。直接会って受け取ったわけではない。人を介して内々に受け取ったのである。慌ただしい中でも名前、品物、贈られた経緯をきちんと記録に残している。母の思いは伊太夫に届いたのではなから

うか。

最初に記された衛卒儀蔵、「御預人定番」の当番表にも名を連ねている足軽である。御預人と番人として、今まで格子越しに接してきた伊太夫赦免の事を聞きいち早く祝いを届けている。繁之丞母は伊太夫が罪を許され江戸に登ると聞き、紫蘇漬をこつづけたのであろう。恐らく直接の面識はないであらうから、かねて息子などから伊太夫の人となりを聞いており、その赦免を喜ぶ気持ちこそうさせたのであろう。一衛卒と一人の母の贈りものは、立場、身分を超え、幽閉の間牢の内、外ではあるが、佐伯の人々と伊太夫のそれまでの交わりがどのようなものであつたかを示しているように思われる。

出発前日二十三日にはこのようなこともあつた。

・多年幽室（飛カマヤ）ニ賑近スル人々唐紙短冊持參ニテ維力揮毫ヲ請ヒ形見ニ残サントテ強テ不止、餘リ固辭スルモ知己ノ意ニ背ケハ不得已短冊（巻）へ蜂腰ヲ書ス、追々請人多、數十枚ニ及ブ・

（再朗読）

親しく交わってきた人たちに、是非一筆と請われ、短冊に揮毫した。その数、数十枚、別れを惜しむ人が

それだけ多かつたということであり、書く方も大変だつたであろう。ところで、伊太夫が別れに際し佐伯の人々に書き残した多数の唐紙短冊、今はどうなつたのであろうか。その何枚かがどこかに残されているのではないか、そうあつて欲しいと願っている。

さて、いよいよ出発の日を迎える。

二 佐伯を出立

前回紹介した角石番所での涙の別れの後、駕籠に乗り二里ほどすすみ、「古内村ナル寺院」で休憩する。ここでも別れを惜しみ酒肴を携えて来た長溝・秋山等と暫時杯を交わした。その折駕籠の中に一書を忍ばせた者があつた。古田某とあり和歌三首が認めてあつた。そのうちの一首は、

八百萬神の恵のかゝるけふ

いとゝめてたぎ別也けり

それに対する伊太夫の返歌

千早振神の恵みのかゝるけふ

別れとなればさすかかなしも

そつと別れの歌を差しいれる古田某、その歌に返歌

で応える伊太夫。返歌が古田某に届くことはなかつたであろうが、別れを惜しみ贈つた歌と返歌が共鳴し響きあう、こんな風雅な別離もあつたのである。

一行は津久見を目指し鏡山を越える。「此鏡山八道險シク山高シ、彦山始豊後の山々見^{マ、}瓦^ワサル」(再p.507) 嶮岨な峠を越え、薄暮津久見村大庄屋宅に止宿する。次の日は、臼杵で休憩し、五ツ時(夜八時)提灯を下げて高田村(現大分市高田)に到着。この高田は大野川と乙津川に囲まれ輪中を作っていたが水害多い所であつたらしい。この時も泊まつた里正の家も八月の洪水で床上五六尺も水が上がつた跡が残つていた。

二十六日高田発、高崎山越えにさしかかる。ここで「折悪雨天ニテ所謂笠縫島不見遺憾也」(再p.509)と記した後、伊太夫は次のような歌を詠んでいる。

雨雲に山分衣うちしほれ

戀れと見えぬ笠縫の島

この歌は四極山から見た笠

縫島を見て詠んだ高市連黒



【笠縫島】前は歌碑

人の歌

四極山うち越え見れば笠縫の 漕ぎかくる棚無小舟

をふまえてゐる。万葉集に出てくる歌がこの高崎山で詠まれており、雨にたたられ見たいと思つた笠縫鳥が見えず残念な思いを詠んだのである。高市連黒人の詠んだ「四極山」がどこであるかは諸説あるようだがここではそのことはおく。

伊太夫は水戸の士であり、豊後に黒人ゆかりの「四極山」そして「笠縫鳥」があることを知つていたとも思えない。とすれば高崎山に向かう道中、護送の者から話題に取り上げたと考えられる。

佐伯の人々が別れに際し贈つた歌は「送別ノ詩歌追々到来、一々記ニ不暇略ス」という程であつたこと。駕籠に差し入れた別れの歌のやりとり。そして道すがら万葉集の歌の舞台が共通の話題にのほる。後に述べらる富士山を見た足輕穀次の即詠。ごく自然に短歌や漢文に親しみ自分のものとしていた、底通する基盤があればこそできたことであろう。江戸時代が育んだ懐かしい豊かな文化の一面が垣間見えるのではあるまいか。

三、大坂までの旅

佐伯を出て四日、二十七日は雨。立石峠を越えて豊前にはいる。立石峠で名物の燧石ひうちいしを求め⑩る。悪路に悩まされながら夜四ツ過ぎ宇佐にたどり着く。二十八日早朝、宇佐神宮参拜。「御普請新ク壮麗也⑪」とある。その後の感想が面白い。「但恨クハ兩部⑫故神宮朱塗ナリ・・」(再p.80) 天保年間神仏分離(廃仏毀釈)を推し進めてきた水戸藩の士であり水戸学を信奉する伊太夫としては神仏が混然とした両部神道の特徴である丹塗りは容認できなかつたのであろう。

その日は椎田泊。大晦日二十九日の宿は小倉、佐伯侯用達の素麺屋。除夜の祝いに酒肴などが出る。宿で聞くところでは、小倉侯は十一日江戸へ発足、家茂上洛の先乗りのためであるという。肥後侯は三千人を引き連れ上洛。薩摩侯は一人人ほど程なく小倉人。などなど中央の情勢を受け段々慌ただしい雰囲気になつてくる。

明けて文久三年、宿の主人心づくしの屠蘇雑煮で新年を祝い、午後渡海下関に渡る。この渡海前に認められた長溝からの御用状には「日割之通旅行仕、伊太夫義

堅固二而折々歩行仕」【御用日記】(史料 No.592 p.104)とあり、これまでは予定通り、伊太夫も元気で駕籠から出て歩くこともあり、順調に旅してきたことがわかる。

中国路にかかり、下関を出発し、六日岩国十四日姫路を経由して十五日大蔵谷(明石)泊。

江戸時代は太陰暦であるから、月齢と暦日が略一致する。明石で迎えた満月の日である。「明石の月」といえば源氏物語にも登場し、古来月の名所として有名である。この日伊太夫はこう記している。

「此夜五ッ過並川(河)ヲ誘ヒ海邊へ出テ月ヲ賞ス、」並河を誘つて明石の月を愛でたのである。『再来記行』中、伊太夫自らが「誘ヒ」何らかの行動をおこした、という記述は外には見られない。護送されていく立場であれば当然のことである。しかしここでは「並河を誘つた」のである。

一週間前の九日には並河についてのこんな話しも書き残している。西条四日市(東広島市)を出立して昼、紫翠庵で昼休み。店の主人が双頭の亀を珍藏、これを見た客が珍しがり短冊・書帖などを残している。

小倉侯を始め多くの人の詩歌を摺り物にしてこれも客に配り自慢の種である。伊太夫も何か、と請われるが固辞。店を出た後、並河が

亀の頭壹つありてそたりぬへし

ふたつはなとかとふとかるへき

という戯れ歌を残してきた、と打ち明け、「跡ニテ主人失望為るべしと笑いき」(再p.92)、というのである。

いくら人々が珍奇であるともてはやそうが、頭は一つで十分、というまっとう冷静な考え方が伊太夫と通じる所があったのであろう、わざわざこの一挿話を書き残している。何か心の通じる並河であればこそ、明石の月を共に愛でようと誘つたのであろう。

向二淡路島左二舞子、右二明石川口常明灯、烟ノ中炎
彷彿トシテ月影殊ニさへ渡リ未早春故隴ニモナク奇
絶ノ景光不可云、然ル中二秋山来リ暫ク彷徨シテ旅
宿ニ返ル、
(再p.92)

この夜は明石川口の常明灯が煙の中からほのかに見える。見上げればまだ春の朧月ではない冴え冴えとした満月が望まれる。並河と二人で月を愛でている内に秋山もやってくる。

あかし瀧なみうち際に並居して

む月の空の月を見る哉

三人で明石の満月を並居して眺め、何を語りあったのであろうか。

翌十六日須磨を過ぎた辺りで因州侯の行列に行き会う。作法通り下乗して行列を見送る。行列通過してすぐに因州侯の近習が伊太夫に是非逢いたい、との殿の意を伝えた。駕籠で兵庫まで赴き、拜謁した。

因州侯からは、遠国に預かりとなった労苦を労い、更に、赦免になったのも二年前になくなった因州侯の父、水戸先代斉昭公のおかげであろう、それにしても今少し御在世ならばどんなにか喜ばれたらう、との言葉があった。

さらに水戸藩を案じたこんな言葉もあった

先様(斉昭)トハ御向王違ヒ・何ヲ申モ兄弟中直情
ニ申カヌル事も有之候ヘハ帰国之上ハ夫々心付之儀
具ニ申上輔佐致候様頼ム。

(再 p.622)

兄慶篤を案じながら兄弟と雖も直言できぬこともあるので、水戸に帰ったら宜しく頼む、という言葉には、因州侯池田慶徳が水戸藩の情勢、兄の立場を案じ

ている気持ちがいじみ出ている。事実水戸藩は幕末激動の中藩内で尊皇攘夷派(天狗党)と保守門閥派(諸生党)に分かれ血で血を洗う抗争を繰り広げ有為な人材を失ってしまふ。伊太夫もこの抗争の中で仆れてしまったことを考えれば、後の運命を暗示したような対面であり言葉である。

最後に旅中とて遣わすものもないが、と青蓮院宮から拝領したという「池の水」という菓子を頂いた。西宮に帰り着いたのは暮時であった。

翌十七日、武庫川、尼崎を過ぎ十三で昼休み、八ツ時(十四時)佐伯藩蔵屋敷に到着。佐伯を出てから二十四日目のことであつた。その夜大坂相撲の親方小野川秀五郎が尋ねてきたが、「謝シテ不逢」ということもあつた。又十二月九日、毛利高泰が高謙に家督を譲り、今侯は八日に老侯は九日に江戸を出立したこともども聞かされた。

四、東海道の旅

蔵屋敷で一日疲れを休め十九日蔵屋敷前から船で出発。伏見で一泊、逢坂の関を越え新しく掛け替えた

瀬田の唐橋を渡つて草津宿で泊。夜に「遠城寺源兵衛・尋来り酒一壺草津産汐見饅頭ヲ祝ニ贈ラル、三年超ニテ面會、同氏モ喜悅不斜依テ杯ヲ酌ム。」(再p.626)。赦免と三年ぶりの再会を喜び汐見饅頭で一杯やったのである。二十一日提灯を提げて払暁宿を發つ。水口宿で去る九日に出發した老侯高泰が昼休み中であつた。長溝等は早速挨拶に出向いた。控えていた伊太夫に国矢藤衛門(マツ)が使者として訪れ、挨拶をしたいが体調もよくないので逢えない、との意向が伝えられた。しかし挨拶に出向いた長溝が帰つて来て言語不自由ではあるが逢いたい、とのことですぐに出かけ宿で対面している。高泰の様子については「言語洩り不分明、余程肥満ノ容貌ニ見ユ」と記している。体調のこともあり、一度は躊躇しながらも対面している。家督を譲る一因ともなつたであろう不自由な体をおして、自分の治世中に御預けとなつた伊太夫に、ねぎらいと祝意を伝えたいと思つたのであろう。

『御用日記』などでは藩主の病状などが記されることは殆どないであらう。私的な旅行記であつたからこそ残された記述である。

対面が終わつた所で守衛をしていた面々が次々に挨拶に来る。慌ただしい中ながら嬉しい話があつた。

内藤某ト云貴僕、先年江戸留守居ノ宅ヲ尋ネ、御国元御両親始家内御平安也、宜敷申通呉ル様頼ミケルト云、始テ国元ノ安否分リ雀躍不已。(再p.626)。

鮎沢家の家僕が江戸佐伯藩留守居宅を尋ね家族の無事を伝えてくれるよう頼んだという知らせである。初めて家族の無事を知つたのである。「雀躍不已」の四字に伊太夫の気持ちがかもつている。

次の土山宿では老侯より一日早く江戸を發つていた高謙にも対面している。ここでも守衛であつた竹中・黒木・古河等の面々から祝いの挨拶を受けている。竹中からは次のような話があつた。

礫邸堀口君へハ度々御尋申、御安否モ其時ニ委ク申上ケル、夫ニ付テモ御家兄誠ニ御残念、御雙親様始御平安ノ由、御子息君へ三人扶持被下ケルト、
(再p.626)。

竹中は度々礫邸(水戸藩江戸小石川藩邸)を尋ね伊太夫の安否について知らせていたのである。又家族兄弟の近況についても伝えてくれた。兄と甥の死もこの

時に知つたのである。又両親が元氣なこと、息子に三人扶持が与えられていた。喜びと悲しみの知らせ「竊ニ旅服ヲ沾ス、喜中ノ悲嘆」と記している。

二十六日袋井宿へ止宿。次の金谷宿を過ぎれば「大井の渡し」であるが、この大井川が今朝川留めとなり、「諸家之飛脚早打を始・・其他諸家之士絡纏不絶往来殊の外混雑ス」という状況であつた。この日は暑いほどで夕方雨が降り出し、それがたつたか長溝が風邪をひいてしまふ。ほかの者も「流石氣忙敷誰も辟易」とある。

大井川を越えた辺りから大名の往来も慌ただしくなる。行列も劍付の西洋筒を持つなど緊迫の度を増してくる。宿も厳しく、江尻では雲州侯泊とて宿なく、興津でも鍋島侯、秋月侯奥方泊まりで寒風吹きささぶ中、ようやく清見寺門前の宿に泊まる。秋山も風邪で「大二弱レリ」という状況になつてしまつた。田子の浦を隔て富士を望み「奇絶不可言」景色であつたが、二十九日は「昼頃夏長溝氏病症殆苦痛ノ様子也、並河秋山も風邪二而不臥」、皆の疲れもピークに達していた。

次の日は富士の裾野に沿つて進み、三島明神に詣で

ていよいよ箱根越えである。その夜は長溝が柏原名物の蒲焼きを調えくれたので「山中却而美味を食フ」。みんなの元氣も回復したであらうか。

二月二日箱根の関を過ぎ険しい下り道となる。混雑は甚だしく、黒田侯、二条城番、高家京極、青山因州の行列と行き会う。日暮れ大磯宿では阿波侯泊で宿もなし、平塚宿へ。

三日は朝は大霜、後晴れて暖かくなる。とおりがかつたのは広重の浮世絵で有名な南湖の左富士。

朝日出ツ富嶽右二見ユル、霄二雨降ケルカ、山々皆雪也、富士毛真白二見ユルカ、旭日出る二随ひ色赤シ、駿河路より曇りけるか、晴々と見ゆるに付、從卒穀次相悦即詠アリ (再 a636)

前日まで雨が續いていたのだが、この日は見事に晴れ、雪景色の富士が折からの朝日に赤く染まつている。從卒の穀次が感動して、即興の歌を詠んだのである。ただ歌そのものが記録されていないのは残念である。

神奈川を過ぎ、いよいよ前年八月の生麦事件の現場にさしかかる。その緊張感漂う様子などは次回。

- (1) 大日寺書院書院棟札に「文政十一戊子(1828)」とある、とのことであるから伊太夫滞在より前に建立されている。一部改装されているが間取りなどは当時のままだそうである。写真奥三畳が「上段」次の間六畳、あわせ「上段の間」、敷居より手前三畳が「鞘の間」。上段は框の高さに上段が設えられていたが今は同じ床になっている。両側の柱に七寸高の上段框跡が残る。次の六畳が棹縁天井であるのに対し、上段は高さも少し高く格天井となっており格の違いを表している。「鞘の間」は畳廊下の意味があり、対面などの場合はここが入口であつたと考えられる。
- (2) 恩命 遠嶋赦免の申渡書に「遠嶋申付候處京都合被仰出候厚趣意も有之・・」(「御用日記」p.77)とあり、水戸藩を通して朝廷から幕府への働きかけがあつた様子が窺え、このことを指すのであろう。
- (3) 伊太夫が滞在した書院鞘の間の障子を開ければ濡れ縁。その外が後庭となつている。後庭は一部墓地になつているようであるが、大樹も聳え、昔の面影を伝えていゝる。「佐伯藩時代屋敷図」でみると庭の続きは堀となつ

ており、その先に万年橋付近の往来が見渡せたと思われ。

- (4) 山崎柴山「非常危機に対する安政大獄と殉難」日本時代社 1934 p.127

- (5) 維 伊太夫のこと。伊太夫の名は「國維」である。

- (6) 蜂腰 広辞苑に「蜂腰病の略」とある。漢詩で平仄があわぬものの一種をいうらしい。ここでは自分の漢詩の整わぬことを謙遜していったものであろう。さらに、この記述の後に「また人々より短冊をおこしてやまとうたをしひて好まれければ」という詞書の後に「よしあしもなにはと人にせめられてかきのこしたる水荳の跡」(再来 p.594) という短歌を詠んでいるので、漢詩だけでなく、短歌も請われるままに書き与えたのであろう。

- (7) 古内村ナル寺院 「古内村」は、角石番所から二里という距離からすれば「古市村」であろうと思われる。江戸時代、古市村の寺院は「佐伯市史」によると寛保元年四月佐伯藩宗門奉行土屋亦兵衛が記録した「御領分中寺社記」に「福円寺」が古市にあつたと記録されている。そうである(「佐伯市史」p.853)。同史には福円寺(本

匠村中野笠掛は後明治十一年十一月古市村から移る、とも記されている。(『佐伯市史』p.890)。福田寺が当該の寺院であるかどうかは不明である。

(8) 「笠縫島」については、最有力の「摂津説」外にも「河内説」「豊後説」などがあるようである。諸説の紹介、考証などについては、『挟間史談第五号』2016年7月 佐藤末喜「黒人は高崎山を越えたか」が詳しい。笠縫島の所在地は大分市生石港町二丁目。今は「万葉歌碑公園」として整備されている。しかし現在は周りは埋め立てられ、



ビルや工場に囲まれ何とも無粋な光景となっている。左のこんもりした木の生い茂っている小高いところが笠縫島、その右手の建物の右に山の稜線が見えるが、その延長が高崎山となる。高崎山から眺め、沖の海に形のよいこの島が見えれさぞいい眺めであったろうと思われる。

(9) 日常の生活の中でも短歌に親しんでいた例として、このような一連の短歌も残されている。残されていたのは高妻家。

写真のように扁額にして掲げられていたそうである。

「十四日夜月 小夜更くるまたまた
かけもさやかにてはつきのもちに
入方のつき」から始まり、十五夜・

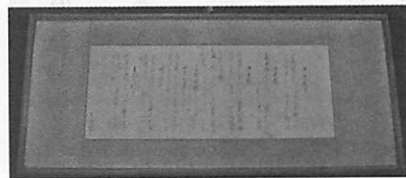
十六夜・立待・居待・臥待・はつ
かの月まで一首ずつ詠まれている。

満月だけでなく月が満ち、かけていく様をのどやかに愛でる心が伝わってくる。居待には歌の前にこんな

詞書がつけられている。「十六夜立
待の月もいと哀れにさやけかりき、

さるを居待の空は雨雲立覆ひければ」雨雲に覆われた見えぬ月も又いとおしんだのである。推敲の跡も残るいわば草稿を、高妻家では扁額にして大切に伝えている。月を愛で、歌に詠み、言葉を磨き、書き残された作品は伝えられてきた。時代を経たその額には、今とは違う価値観が籠められているようである。

【佐藤巧氏のご教示による 現在は佐伯市歴史資料館所蔵】



(10) 立石名物燧石 胡麻鶴岩八 『豊後立石史談』歴史図書

出版 1977によると、「立石は燧石の産地として知られ、立石(六太郎角)の名は遠く上方地方に迄及びしと云ふ。」とある。

(11) 両部神道 「真言宗の金剛界・胎藏両部を以て神道をを説明しようとする神道説。『広辞苑第二版』その成立は平安後期とされるが、宇佐神宮はそれよりはるかに早く奈良時代に神宮寺である弥勒寺が建立されている。主神八幡神も「八幡大菩薩」などと唱えられ、平安期には僧形の八幡神像も各地で多数制作されている。

(12) 明石の月 【源氏物語】 十三帖「明石」

のどやかなる夕月夜に、海の上、曇りなく見え渡れるも、住みなれ給ひしふるさとの池水に、思ひまがへられ給ふに、いはむ方なく戀しき事、いづかたとなく行へなき心地し給ひて、ただ目のまへに見やらるゝは、淡路島なり。「あはとはるかに」などの給ひて、

あはと見る淡路の島のあはれさへ

残るくまなく澄める夜の月

【旧版 岩波古典文学大系「源氏物語二七〇」】

(13) 因州侯 因幡国鳥取藩十二代藩主池田慶徳。水戸前藩主徳川斉昭の五男。

(14) 大坂蔵屋敷 旧淀川(安治川)に面し弘前藩蔵屋敷の東隣にあつた。現天満警察署隣、大阪辯護士會館會館辺りである。

(15) 小野川秀五郎 相撲力士。安政四年(1827)に引退し、大阪の小野川部屋の八代目になる。つねに勤王を唱え、力士の一隊を率いていたという。

(16) 竹中「御用日記」(史料 No. 552, 553) に守衛士の当番表が記録されておりその中の三組に「竹中武之丞」とあるので、この竹中のことと思われる。

(17) 御家兄様 鮎沢伊太夫の実兄高橋多一郎。高橋は桜田門外の変の首謀者の一人。大坂での潜伏地を幕吏に探知され、息子と共に自刃。万延元年三月、伊太夫幽閉中のことであつた。